

岡山・広島・岩国

俳句倶楽部

令和八年九月作品集

聖湖

すみれ

父は小学校の教諭だった。山縣郡内を転々とした。私たち七人姉妹は出生地がばらばらで、私は樽原村で生まれた。今は聖湖の底となり、村は消滅した。その村を、沈む前に一度だけ訪ねたことがある。村人は現状の報告と歓迎を兼ねて父を迎えてくれた。

その夜は、立ち退きしてない家に泊まった。大人は延々と語り、酒を酌み交わしていた。子供の私は、秘密めく話に恐怖を覚え、一睡も出来なかった。

今では、年に一二度、聖湖と八幡高原を訪ね、言い知れぬ安堵感に浸る。そこは、私の第二の故郷である。高原に咲く松虫草、女郎花、吾亦紅、そして芒原が私の心の風景だ。

夏来れば八幡高原へ行くと決め

夏草に銀輪倒し村に入る

炎昼や立ち退かぬ人集まりて

秘密めく村人の声夏の夜

暑き夜のひそひそ声に怯えたる

帰り道滴る汗に皆黙し

握り飯頬張り汗と涙拭く

夏草や時に湖訪ねたし

松虫草静かな風に任せをり

天高し湖底に我の生地あり

《作品鑑賞》

暁子

故郷の門口に立てば、誰でも思いは懐かしい過去に帰っていきまふ。まして、その故郷が水底に沈み、昔を偲ぶよすがも無いとなれば、記憶の奥底に沈んだあの日々の姿や声が、鮮明に蘇がえることもあるでしょう。

夏来れば八幡高原へ行くと決め

作者の強い想いをきっぱりと詠まれました。

秘密めく村人の声夏の夜

隣の部屋からひそひそと話し声がします。子供心にも話題の深刻さが伝わり、その話し声の中に大好きな父親の声も混じっていることが、余計に作者を不安な気持ちにさせました。

松虫草静かな風に任せをり

八幡高原の風に揺れる松虫草、私もいとおしくてしばしそこから離れられませんでした。

天高し湖底に我の生地あり

深い記憶の旅が終り、現実に戻れば、高い空の下、碧々とした湖が静まり返っています。聖湖の空気を胸いっぱい吸い込めば、又明日からの力が湧いてくるのです。

炎天下息の一つが聞こえたり

ざぶざぶと時計を洗ふ炎天下

木槿咲く頃癸掬の終りけり

癸掬を終へて見てゐる雲の峰

遠山の名前は知らぬ青田道

割り跡の石を渡りて天魚釣

美作の山釣終へし芒原

槌ほどの沢の流れや秋の山

赤とんぼ我も両手を広げたり

大川に始終映りて秋の雲

佐保光俊

秋立つと朝の光に思ひけり

白鳩の川面を渡る今朝の秋

秋暑し雀大樹の葉を揺らす

音もなく処暑の大河の海に入る

雨の間に雀の鳴いて涼あらた

枕木に沿へば聞こえて虫の声

髪切れば二百十日の風の梳く

野分かな葉にさらさらと日照雨降る

ひとつづつ落つる木の葉や秋の雨

秋の雨部屋を灯して本を読む

高尾ひとみ

魚追うて上げ潮に乗る川鷄かな

山里にアパート増えてカンナ燃ゆ

サフランの匂うてゐる坂の道

杖つけば背筋まつすぐ秋日受く

蘭の香や時をり大きな雨の音

鉄塔を建て替へてをり霧の中

コンテナの列車の長し芒の穂

里山の竹伐る音の響きけり

山里にはや灯の消えて虫の闇

敬老の日カステラ届く嬉しさよ

あぐみ

電飾のトラック過ぎる真夏の夜

生き物の音の聞こゆる炎暑かな

夫の菓子手前に置かれ冷蔵庫

炎夏の乳母車から寝息かな

夏深し読み進めたる基次郎

小鰯をひたすら開く昼日中

秋の蚊の死んでゐるなり文机

飛び交へる球児の声や秋の蜘蛛

落ちし蟬よけゆく平和大通り

基次郎読み直したる秋の暮

亜矢

呉線のホームに待てるサングラス

丸窓の光差し入り夏茶碗

翡翠の枝先に居て濠静か

蓮池や木橋を過ぐる声しきり

瀧音に濃くなりゆけり山の色

青鳶のいよよ濃くなり古き宿

道に沿ひ町家の灯影夜半の夏

古堀にいきなり鳴ける夜蟬かな

百日紅かすめて通る島のパス

信号旗はためき宇野の夏遊けり

井藤希

住んでゐし町を訪うたり蓮を見に

留守の間に百日白の咲いてをり

テノールの車寿の声や秋に入る

地蔵へと夕日の差せる残暑かな

庭仕事の肌に日の差し秋暑し

葛の花景陰にありて香りけり

りいりいと鳴く声を聞き夜半の秋

雨上り虫の音高く聞こえけり

秋の薔薇心に沁むる白さかな

杜鵑草小さき花瓶に挿してみる

大畑恵

指さして山の子秋の星を言う

谷の瀬に薄日の洩れて秋の蝶

葛の花山路途切れんばかりなる

師の家を辞して出でれば星月夜

里人の宮へ供へし走り藪

古畳にはふ離れや虫すだく

欄干に鰐跳ぶ音の二つ三つ

秋の蚊を払ひ園バス待つてをり

秋蟬の間遠の夕や庭を掃く

庭木刈つてまた現はれし瀬戸の海

暁子

馬追の一際大きな声傍に

目の前の壁に来て鳴きつくつくし

墓参り出会ふ人皆会釈して

墓の裏何時しか虫の声となり

句会終へしばらく見上ぐ盆の月

葵の実の調理知らぬと若者来

生垣の零余子を取りて飯に入れ

秋茄子を焼いて交代夫の調理

用水の土手にも地番里の秋

外に立ち腰を伸ばせば天高し

すみれ

洋館の螺旋階段見上げ夏

短夜や映画のポスター部屋に貼り

短夜や着信音を選ぶるて

駄菓子屋に飴玉をかう夏休み

友達とあだ名付け合う盛夏かな

夏の浜野球ボールを投げ返し

居酒屋の人生相談熱帯夜

雲の峰助手席で曲選びたる

ぬいぐるみ揉み洗いで雲の峰

西日なか新聞記者の取材受く

竹田千絃

魚の影石から石へ水の秋

水面飛びいつしか空へあきつかな

蟪蛄を見つ話をまた読む

おしろいや赤子産まれし庭に咲き

秋澄めり工事現場の点呼かな

風去りて未だ零れぬ公孫樹の実

ゆつたりと枝のしなりて花梨の実

氣配消ししばらく居れば虫の声

秋の声眠れるままに聞いてをり

菱紅葉バドル静かに差し入るる

知佳子

まだまだだやつぱり母の柏餅

今日は二羽川鷄いつもの岩に立つ

南京を背負うて一步一歳児

幼子の手を持ち花火してをりぬ

今朝もまだ庭木に蟬の止まりをり

かなかなや洗濯物を取り入るる

盆踊の動画を撮りて母に見せ

真夜中に目覚め虫の音聞いてをり

幼子と散歩の途中鹿よぎる

花桔梗母の背中のぴんと伸び

ちどり

山百合の一輪坂を下りけり

夕焼の木曾駒ヶ岳奈良井宿

鰻焼く香や行列の最後尾

飲む水の氷の音も熱帯夜

野天の湯頭を掠めたる鬼蜻蛉

椽の実の落つる木蔭に吾と雀

稲咲いて全景見ゆる八ヶ岳

巻雲に紛れて昼の三日の月

虫の声読み古したるページ緑り

夜汽車聞く我に月光親しけれ

辻純江

一八を見てゐて父を思ひたり

帰宅して門に咲きたる白丁花

向日葵の園庭に子を迎へたり

遠くから凌霄見ゆる帰り道

凌霄の花昨日より数を増し

庭掃除終へて座したる夏夕べ

真つ昼間通る人なく百日紅

昨日今日雨強く打つ夏の果

コスモスや受駭せし子の報待てば

葡萄買ふ子から帰ると知らせ来て

雲雀

青年が川の石跳ぶ螢狩

夏の蝶門扉を越えて城の墓

石垣に戻らぬ石や草茂る

本丸の跡に空あり青葉あり

万緑と川を眺めし城主かな

切り株に下界開けて南吹く

指弾きのギターソーダの泡上がる

チャルダッシュ玉の汗なるバイオリン

窓だけの列車が過ぎる熱帯夜

吊橋の支柱夏雲を高める

ふじ女

黙禱や一分間の蟬しぐれ

帰省子の大阪弁で子を叱る

大クレーン入道雲を横切りぬ

芋虫の枝の形に身を曲げて

ひぐらしの鳴き声途切れ途切れかな

木槿落つ夜の帳を知らぬまま

流水の八月尽の海に浮く

赤とんぼ母の墓石を回りたる

曼珠沙華飛び火すること増えにけり

秋の宵隣家の赤子泣き止まず

松田裕子

灸花門扉絡めて咲いてをり

街路樹に沿うて駆けくる驟雨かな

爽籟や柔音に樟を見上げたり

色鳥や奏づる若きカルテット

川の辺に列をなしたり彼岸花

去ぬ燕集ふを見せず去にたるか

くろがねもちに秋日差したりコーヒー店

秋の夜のラフマニフを聴いてをり

真夜の厨夜食にツナ缶開くる音

薯蕷飯然し手合はし掻き込み

村上正人

洗濯の白シャツ過る通学児

屋台が好き焦がし醤油の烏賊が好き

諸手して一気飲みせる石清水

鉄砲百合仏間に里の香を連れ来

瘦せし身の仏間に深き西日かな

地植ゑせる仏間の薔仏桑花

法師蟬庭に聞きつつ水仕事

白雲のなびく前山稻の花

呟きはしばらく逝けぬ墓洗ふ

指先を差し出してみる赤とんぼ

森口良樹

田水沸く畦に人影三四人

高枝の鴉うつくし大西日

夏神樂の支度整ふ木立かな

覗き合ひ勾玉削る夏休み

鐘の鳴る八月六日登校す

八幡の長き石段カント燃ゆ

夜顔のつばみ数ふる垣根かな

この土手に太古の杭と葛の花

虫聞いて唄口遊ぶ山路かな

今井淳子

秋日差し椅子取りごつこの子供かな

ゆつくりと母歩みけり彼岸花

花蕎麦にバス終点の車庫のあり

風の吹く穂草の原に踏み入りぬ

牧場に父と子の居て赤とんぼ

草の穂の道を行きけり戻りけり

秋の蝶御堂に入りてしばし飛ぶ

遠ざかる姉妹の声や秋彼岸

煮花果の熟るるを待ちて分かち合ふ

灼くる風まともに受けてたぢろぎぬ

帰り来て部屋に籠もれる残暑かな

亀甲の葡萄ずつしり掌に

桃かじる鼻の頭を濡らしつつ

葡萄食む親指の爪染めながら

今は煮き卵の鍵や鰯雲

そよりともせず迎ふる鬼貫忌

父のことしきりに思ふ鬼貫忌

新涼や足の裏にも腋にも

海水浴砂に絵を描きまた海へ

月見むと夏暁の西仰ぎけり

炎昼の防空壕の閑静か

原爆忌いつもの橋に朝日見る

馬追を払うて開く実家の戸

夏座敷実家に古き鷹の軸

行列で墓参りする蓮の花

遺影見し帰省の夜に母の夢

秋はいつ娘の同ひし蜻蛉かな

桑門わかこ

藤堂暢子

なつ

登高や瀬戸の夕日を下に見て

水切りを競ふ子釣瓶落しかな

調理室の窓に子の顔秋高し

手に受けて青く冷たき蜜柑かな

稲束の重さに傾ぐ一輪車

時満ちて堰に流るる桐一葉

長き夜や旅の雑誌を読み終へて

紅葉狩道を譲りて行き交ひて

宿探す見知らぬ街の秋ともし

山野ウタ

老鷹や美術館より出てくれば

下り立てば山から聞こえ蟬の声

校庭の木からしきりや蟬の声

湯に浸かりサンダルの跡なぞりをり

蟬の声カレーを待てば聞こえる

赤とんぼ外でカレーを食べをれば

学校へゆく道に摘み夕化粧

交差点右に曲がれば秋の海

土肥律子

夏祭赤き法被で四つ拍子

花々のおのおのに吹き秋の風

野路菊へ波音絶えぬ崖の上

水澄みて並んで動く魚影かな

団栗を拾ふ子遅れ山歩き

藤袴アサギマダラの未だ来ず

いざよひの園から出でて塔の上

前田範子

いやいやと走り出す子に蟋蟀跳ぶ

秋の宵スイングジャズを口遊む

飽きもせず秋茄子食ぶる夕べかな

どんぐりを二つ握つて寝る子かな

旧姓で呼び合ふ友や秋うらら

途中下車してみたくなる花野かな

熊谷ゆり子

夫打ちし釘に風鈴吊るしけり

秋風や駅に里唄鳴りやまず

秋霖やフェリーで巡る松島湾

秋霖の坂を上りて瑞巖寺

瑞巖寺出れば数多の法師蟬

長旅の果てや我が家の虫時雨

高嶋絹代

はたた神木の影一瞬カーテンに

数石に水をたつぷり今朝の秋

全開の窓より秋日届きけり

白秋や訪ね来る人今日は無く

秋高し朝の鳥の多きこと

大原良子

潮満つる二百十日に鷺並ぶ

人慣れをしたる鶺鴒しやがみ見て

仏壇の竜胆色の濃ゆくなる

月すでに出てて昼から酌みにけり

秋の夜街ゆく人のまばらなり

上島康子

家人の誰も気付かぬ夜半の雷

秋場所の小兵台頭著し

活くるのに器選ばぬ吾亦紅

誰一人遅れずに来て秋の旅

秋深し話の続き待つてをり

高梨英子

シーツ干す母の足元鳳仙花

梨をむく腕に汁のしたたりて

秋風や友の手紙を読み返し

番犬の居眠りしたり柿たわわ

草の露震へながらも留まりて

桂子

体操を終へて背に聞く蟬時雨

ひらり来てすつと消えたる夏の蝶

走り来てバスに遅れし夏の昼

暮六の入道雲のまだ湯きぬ

小半時ベランダを打つにはか雨

みさ子

カンナ咲き土手の向うに日の沈む

秋めくやいつもの山道走りゆく

白露かな散歩の犬の足濡れて

一面に咲く蕎麦の花風に揺れ

秋うらら寝転ぶ縁に日の入り

美耶

残暑とは飛ばせる水も生ぬるし

秋暑し雨雨降れと口遊む

ゆるゆると秋風のなか八十路かな

庭隅の露草藍のひかり含ひ

雨音の湯に浸りたる秋の宵

やす保

久々の秋の晴間に窓を開け

美しきすすきを切りて瓶に挿す

花すすき一本だけの花瓶かな

曼珠沙華だけを残して草刈りぬ

紀英子

夏の朝網戸を洗ひ塀に立て

乾きたる網戸嵌め終へアイスコーヒ―

レジ袋手に食ひ込みて汗滲む

路地に座したただただ眺む郷の盆

桜陽

今朝の秋風に暦の捲れたる

山里の日の過ぐる頃萩の声

秋の夜の夫の残せし智恵子抄

トタン屋根に栗落つる青里の夜

森田敦子

軍手買い栗剥く準備整ひぬ

栗剥きのスピード徐々に落ちにけり

暮の脇一本の白彼岸花

新品の靴を拭きたる秋の雨

山崎桂子

通り雨雲の切れ間に秋の虹

こほろぎはもう鳴いたかと妻の問ふ

景を捲り螳螂の子の写メ送る

上條忠

炎天下日傘を差して歩く人

実家より大きな西瓜今朝届く

大皿に真つ赤なトマト並べたる

河原静子

幼子が夕餉を知らず栗ごはん

刈る度に青き香のする晩稲かな

夢覚めて記憶を辿る夜長かな

志路 猿

百日紅風にそよぎて昼下り

野分して雨戸を強く叩きをり

衣被器にひとつ残りたる

民

音楽に心はぐるる秋の夜

宇宙のかなたから来る秋の光

星月夜光に満ちて我の上

弥生

ブラシかけサンダル眺め時過ぐる

窓を開け耳をすませば秋の蟬

古川廣子

令和八年八月度作品集より

高尾ひとみ 私の選んだ十句

燕の子に使ひし箸を洗ひけり	佐保光俊
木の匂ひ草の匂ひや涼新た	あざみ
夏の暁この辻いつも風吹いて	暁子
初蟬や朝風通す窓を開け	辻純江
陰に飛び日面に飛び夏の蝶	雲雀
蟬の声静かな今朝ぞ母逝ける	村上正人
もう君は初蟬鳴くを知りをるか	森口良樹
ここもまた朝の光や茗荷の子	今井淳子
三伏や蛇口より湯の迸り	藤堂暢子
つくつくし鳴き終へてまた鳴き始む	桑門わかこ

松田裕子 私の選んだ十句

初蟬に池まんまんと水湛ふ	佐保光俊
蹴飛ばすをためらふ色や梅雨茸	暁子
八十路過ぎ今日も愉しき金魚玉	すみれ
半年ぶり母連れ帰る青田道	ちどり
薰風や臍の緒揺るる牛の乳	ふじ女
蟬の声静かな今朝ぞ母逝ける	村上正人
よき風を通す茅の輪の社かな	森口良樹
海の日のアンモナイトに触れてをり	土肥律子
干し物をパンと叩くや空高し	大原良子
胡瓜揉み旨し旨しと朝餉かな	美耶